

<h1>指導資料</h1>	<h1>外国語 第97号</h1>	
	対象校種	小学校 中学校 義務教育学校 高等学校 特別支援学校



 鹿児島県総合教育センター
令和4年10月発行

外国語科における「コミュニケーション能力」を見つめ直す ーこれからの授業づくりに改めて必要な視点ー

- ◆ 外国語科の授業づくりの際、「コミュニケーション能力」の要素を意図的に取り入れることで、より目的・相手意識をもった授業づくりが実現できる。
 - ◆ これまでの「コミュニケーション能力」の要素を大切にしながらも、デジタル時代に求められる要素を取り入れることで、より質の高いコミュニケーションを図ることができる。
- #「コミュニケーション能力」の四要素 #創造的言語使用能力

1 よくある事例から

これまで私自身外国語の授業を実施して、あるいは他校の授業を参観していて、このような導入事例があった。

事例1：対象小学6年生

“Big voice!” “Big smile!” と教師が子供に投げ掛けながら、単語を練習する。

事例2：対象中学3年生

“How is the weather today?”

“What day is it today?”

といった定番の質問から授業が始まる。

多くの教師が、この事例のような授業を実践した経験が、あるいは子供だった頃、実際に体験したことがあるのではないだろうか。一見、教師と子供が活発に、円滑に英語でやり取りをしており、コミュニケーションが図られている場面に見える。しかしながら、事例1のように、「いつも大きな声」で、また「いつも笑顔」でコミュニケーションを図る場面があるだろうか。また、事例2のように「今日の天気は」、「今日は何曜日」という導入は、中学3年生という発達の段階に即しているだろうかといった疑問が生じる。

外国語科授業の本質はコミュニケーションでその目的や場面、状況等を大切にすることが重要である。折しも現行の小・中・高等学校の学習指導要領(以下、学習指導要領)において、子供たちの「コミュニケーション能力」が課題であると述べられているが、こうした事例では、「コミュニケーション能力」の育成が図られるのは難しいと考える。教師がコミュニケーションの大切さを見失っているのではないかと感じられる場面もある。そこで、そもそも外国語科における「コミュニケーション能力」とは何かを今一度見つめ直し、これからの外国語科授業づくりに必要な視点について考えてみたい。

2 外国語科における「コミュニケーション能力」とは

これまで学習指導要領の中で、外国語科の目標で使われてきた「コミュニケーション能力」について、その定義は明記されていないが、その理論的基盤とされたのは、1980年代にカナルとスウェイン (Canale & Swain) が提唱した四つの要素(「文法能力」、「社会言語的能力」、「談話能力」、「方略的能力」)から成

り立つ能力である（図1）。

①文法能力	文や文章を作り出す能力
②社会言語的能力	発話の適切さを判断できる能力
③談話能力	文章の構成に関わる能力
④方略的能力	語彙力等の不足等を補って、コミュニケーションを続けていく能力

松川，大城『小学校外国語活動実践マニュアル』p.46より能力の説明のみを引用

図1 「コミュニケーション能力」の四要素

これらの要素については、これまで様々な分析と実践がなされてきている。筆者も、例えば「②社会言語的能力」を、「コミュニケーション能力」を高める授業づくりの視点の一つとして取り入れ、実践を行ってきた。「社会言語的能力」は、社会的に適切な言語を使用する能力であり、相手によって使う言語や丁寧さなどを判断していくことが求められる。そのため、表1のように社会言語的能力を発揮する子供の姿を想定し、目的や場面等に応じた働き掛けを行うようにした。

表1 社会言語的能力を発揮する子供の姿

※ 鹿児島大学教育学部附属小学校の実践を参考 2006年

	高学年
目的	・ 目的を伝えるために必要な英語を使って話す。
相手	・ 相手の年齢・立場等によって、使う英語の違いを考えながら話す。
場面	・ コミュニケーションを行う場면을適切に捉え、その場面にふさわしい英語を使って話す。

例えば、コミュニケーションを図る相手によって、“～please.”を語尾に付けたり、場面によっては、自分勝手に意見等を述べるのではなく、“It’s OK?”と自分なりの表現で相手に確認を取ってから話したりするといった姿である。

冒頭の事例1において、教師側に「社会言語的能力」の視点があれば、「大きな声で、大き

な笑顔で」という働き掛けではなく、「場面に応じた声の大きさを、やり取りにふさわしい表情で」といった意識が働くため、子供自身が声量や表情を考え、主体的に学んだ英語を選んで使うような指示の仕方をするのではないかと考える。

また、事例2でも、図1③の「談話能力」の視点を意識することにより、単発的なやり取りではなく、身近な話題（例えば昨日見たテレビ番組の話題等）を教師と生徒が行ったり、あるいは生徒同士で行ったりするという工夫ができ、文脈のあるやり取りができるのではないかと考える。

このように、「コミュニケーション能力」のそれぞれの要素を授業づくりの視点として意識することで、子供たちのコミュニケーションの質は高まるものと考えられる。

3 これからの「コミュニケーション能力」とは

ここまで、外国語科における「コミュニケーション能力」を見つめ直し、授業づくりの視点としてその必要性を見てきたが、カナルとスウェインが「コミュニケーション能力」を提唱してから、すでに40年以上が経つ。時代は激しく変化し、小学校では高学年に教科としての外国語が導入され、令和2年度から全面実施された。教科になれば、文字の読み書きが入り、教科書の活用や評価が求められるなどの変化から、英語を習得する方に力点が置かれ、コミュニケーションを図る大切さを見失いがちになるという声も聞く。また、1人1台端末の導入、活用により、特に、デジタル時代においては、コミュニケーションの内容・方法まで変化しつつあると言われる。そこで、これからの時代に求められる「コミュニケーション能力」について、バトラー後藤裕子氏の提唱を参考に考えてみたい。

バトラー後藤氏は、その著書の中で、カナルとスウェインが提唱してきた「コミュニケーション能力」を参考にしながら、デジタル時代

に必要な言語「コミュニケーション能力」について図3のような捉えをしている。

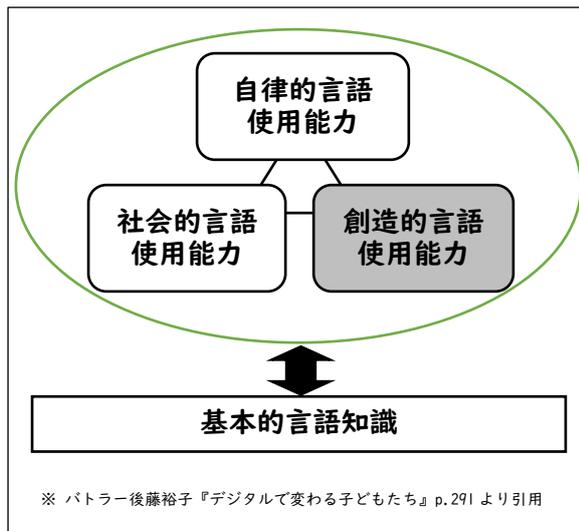


図3 デジタル時代に必要な言語コミュニケーション能力

要するに、「基本的言語知識を土台に、言語を自律的・創造的に使い、さまざまな知識（ここでは言語知識だけでなく、学問や生活に関わることなど多種多様な知識を含む）をインターパーソナルな空間で拡張・発展させていく能力」¹⁾と述べている。ここでは一つ一つの能力についての説明は割愛するが、現行の小・中・高等学校の学習指導要領解説において記載されている外国語の「見方・考え方」の内容と重なりが見られる「創造的言語使用能力」に

ついて取り上げる。バトラー後藤氏によれば、「創造的言語使用能力」は、「主に言語情報から変換された既存の知識を再構成・再構築したり、新しいコンテキストへの植え替えを行ったりする能力」²⁾をさす。学習指導要領解説においても、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することは共通して示されている（下線は筆者による。小・中・高等学校いずれも共通）。

特に、デジタル・テクノロジーの進化と拡大が進む中で、コミュニケーションはますますマルチモダル（複数感覚様式）化するため、既存の知識を新たな状況や場面、相手に応用しながら、やり取りを行うスキルが大切になると考える。では、「創造的言語使用能力」を高めるためには、どのような実践が考えられ、また、カナルとスウェインが提唱したコミュニケーション能力も意識するためには、どのような実践が考えられるだろうか。

ここでは、霧島市立日当山小学校の南木清美教諭の実践を基に、コミュニケーション能力の要素を意識した授業について考えてみたい。

- 1 単元 I sometimes walk the dog.
- 2 対象 小学校 第5学年
- 3 本時（6／7）

(1) 目標

自分の課題に応じた学習を選択し活動を行うことで、表現内容や方法を工夫して自分の「理想の1日」について、自分の考えや気持ちをよりよく伝え合おうとする。

(2) 展開例

【文】文法能力
【社】社会言語的能力
【談】談話能力
【方】方略的能力
【創】創造的言語使用能力

	主な学習活動	「コミュニケーション能力」の要素を意識した支援
導 入	1 挨拶をする。(1分) 2 Chant をする。(2分) 3 Small Talk をする。(3分) 4 本時の学習計画を確認し自分のめあてを立て、学級で共有する。(3分) 【本時の学習のめあて】 表現内容や表現方法を工夫しよう。	○ やり取りのモデルを示した後、ペアで伝え合うことで、モデルとの比較から自分の課題に気づき、自分のめあてを立てることができるようにする。【創】 【チャレンジタイムの進め方】 ☆ 友達に自分のことが分かってもらえるように、工夫してみよう。 ○ 広げる・・・使う表現を増やす。 ○ 思いやる・・・相手に自分のことが伝わるように工夫する。【社】 ☆ 学び方 ○ タブレットで音声を繰り返し聞いて発音する。 ○ 先生や友達に聞く。 ○ 自分の活動を録画したものをみて練習する。
	5 本時の学習の流れを話し合う。(1分) ※ 学習の流れを全員で話し合うことで、見通しをもち学習を進めることができるようにする。	

展開	<p>6 自分の課題に挑戦する。(15分)</p> <p>7 ペアで伝え合い、自分の表現を修正する。(15分)</p> <p>調べた単語をつなぎ合わせて活用できないかな。</p>  <p>難しい表現だから、大きな声で言うのではなく、ジェスチャーも添えよう。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 最後は、自分の学びの成果を録画する活動を位置付けることで、子供が意欲的に学びを進めていくことができるようにする。 ○ 単語のピクチャーカードに音声を録音しておくことで、子供が使いたい表現を選んだり、発音が分からなくなったときに繰り返し音声を聞いて練習したりと、言葉を「広げる」ことができるようにする。【方】 ○ 子供が困ったときには、いつでも指導者や友達に相談できる雰囲気づくりをしておくことで、相手によく伝わるようにするにはどうしたらよいかという視点で、対話を通して相手を「思いやる」工夫を深めることができるようにする。【社】 ○ ペアで「理想の1日」について発表し、友達の発表でおもしろいと思ったところや内容が分からなかったところなどについてのアドバイスを伝え合うことで、自分の発表を客観的に捉え、達成感を感じたり、学びを深めたりすることができるようにする。【創】
	<p>8 振り返りをする。(4分)</p> <p>9 挨拶をする。(1分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供の学びの記録を提出箱に提出してもらうことで、教師の指導法改善に生かしたり、子供の学習の様子を素早く評価し価値づけを行ったりすることができるようにする。 ○ 子供の振り返りを紹介し賞賛することで、子供が達成感を感じ、次時への学習意欲を高めることができるようにする。

※ 霧島市立日当山小学校 南木教諭の実践を基に筆者が再構成

これまでの外国語の授業では、その多くが教師側からめあてを提示していたが、ここでは、単元の内容を基に、子供自らがめあてを立てている。このような活動こそ、これまでの知識を土台にし、考えを整理しながら言語を使用していこうとする力、「創造的言語使用能力」を発揮させる活動ではないか。また、めあてを達成するために、どのような英語を使用するか。南木教諭は、「思いやる」と表現しているが、ここが「社会言語的能力」ではないかと考える。これまでの実践では、“大きな声で” “笑顔で”といった指示をしていたが、それが相手や場面に応じた指示に変わる（“ここは小さな声で” “真剣な顔で”など）。さらに言えば、指示ではなく、子供が主体的に考えるようになる。そして、1人1台ずつタブレットを持ち、やり取りを録画するという方法を取り入れることで、その場で「創造的言語使用能力」を発揮させるようになるだろう。このように、「コミュニケーション能力」の要素を一つでも意識すれば、より質の高いコミュニケーションが図れるようになるのではないかと考える。

4 まとめにかえて

今後デジタル化が進み、翻訳機などの性能が高まるにつれ、外国語科の授業はどのようにあればよいかという声も聞こえる。大切なことは、様々な機器のメリットを生かしつつ、人と人のコミュニケーションを大切にする柔軟な姿勢を忘れないことではないだろうか。また、これからの時代に必要な「コミュニケーション能力」とは何であり、どのように育ていくかといった探究、継続実践、その省察等がさらに必要になってくると考える。同時に、これまでも大切にされてきた「コミュニケーション能力」についても認識することを忘れず、よりよい授業を展開していく必要がある。

－引用・参考文献－

- 1)2) バトラー後藤裕子『デジタルで変わる子どもたち』2021年、ちくま新書、p.291, 292
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』2017年、開隆堂
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』2017年、開隆堂
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編』2018年、開隆堂
- 松川禮子、大城賢『小学校外国語活動実践マニュアル』2008年、旺文社、p.46

(企画課 高味 淳)

※ 本資料は、UD フォントを使用しています。

